

ジオラマのおうち

【人物表】

仲野	平太（38）	鉄道ジオラマオタク
仲野	操（34）	平太の妻
源田	克代（60）	鉄道模型専門店店主
赤ん坊		

【梗概】鉄道模型オタクの仲野平太(38)は、ジオラマ作りに没頭するあまり、大地震の日、妻の操(34)と赤ん坊ではなく、ジオラマを守ってしまい、操に家出されてしまう。自分は薄情なのかと悩んだ挙げ句、操からの贈り物の模型のおうちをジオラマに据え、そこに家族がいると想像しながら、ジオラマに大地震を起こして自ら破壊する。大泣きしてしまう。平太は、家族を守るのは自分だと操に伝え、彼らなりの生き方を、操と考え始める。

S E ジオラマの模型列車が走る音

氷入りの飲み物を飲み干す音

平太 M 「田井ノ浜駅にもうすぐ夏がやって来る。路線図にない駅、海水客がやってくる。夏にしか、列車が止まらない海の駅。結婚して3年、俺たち家族は、美しい田井ノ浜のそばに住んでいる」

S E 模型列車の走行音に波音が重なる

4

平太 「ちゃんと波の音もかぶせた、と」

操 「平太さん？」

平太 「なに？ 操ちゃん？」

操 「そのジオラマ、完成したら、お願いがあるの」

平太 「え？ なに？」

操 「この部屋、やっぱなんとかしよう！」

平太 「なんとかって？」

操 「お正月に話したでしょ？」

平太「ああ、あの話か……」

操「このアパート、食べるところと寝るところしかないのに、寝るところが全部、ジオラマに占領されてる、押し入れも全部！」

平太「食卓を隅に片せばいけるでしょ？」

操「健太は？ 健太がハイハイしだしたら、どこで遊ばせるの？」

S E 赤ん坊のぐずり声

平太「操ちゃん、結婚するとき言ってくれた

5

よね？ ジオラマ作らない俺は俺じゃない、温かく見守るから籍入れよって、」

操「言ったよ。ジオラマがダメって言ってるんじゃないの！」

平太「でもこのくらいの部屋がないと、俺、」

操「お正月の地震の時、なんとかしなきゃって話したよね？ 震度3だから助かったけど、防災用品まだ全然足りてないし、ミルクとかオムツとか少しずつストックしてる

けど、もう置くところが、」

平太「うーん。操ちゃんの言いたいことはわかる！でも、地震、しばらく来ないんじゃないかなあ」

操「そんな呑気な、」

平太「ね、もうちょっと待ってよ！これ見て？夏にだけ列車が停まる田井ノ浜駅と、目の前の美しい海！そして、この列車が死んだ父さんと子どもの頃に乗った『むろと』だよ。できれば、ここ、前言ったけど、ここら辺に、理想の小さな家の模型でも置いてさあ、」

SE けたたましいスマホの地震アラーム
地鳴りがし始める

操「え？え？きゃあああ」

平太「お？おおう？操、健太！？」

SE 沢山の物が次々落ちてくる

模型列車、転がり落ちる
その車輪が空回りする音

平太「む、むろとが！？」

操「健太ー！？」

平太M「生まれて初めての大きな揺れだった。

俺は、気づくと、作りかけの大きなジオラマを両手で押さえ、守っていた」

SE 揺れ、次第に収まってくる

列車の車輪、まだから回っている

赤ん坊が泣き出す

平太「操、大丈夫か？ 凄いな、咄嗟に健太

と食卓の下隠れるなんて、さすが母親、」

操「(遮って) ひどい……」

平太「え？」

操「平太さん、私たちより、ジオラマなの？」

平太「え？ まさか！？」

操「止めて、止めてよ！ その電車！」

平太「え？ あ、これ？」

S E 模型列車の車輪の音、止まる

波音だけがひびく

平太「これ、電車じゃないよ、デューゼルだから、」

操「（泣き声）どうでもいい！ サイター！！」

S E 赤ん坊のさらに大きな泣き声

母子、部屋から出て扉を叩きつける

8

平太「操ちゃん……」

S E 街の喧噪

ドアベルが鳴る

沢山の模型列車が走っている

克代「いらっしやい。あんだ、こないだの地震、大丈夫だったかい？　うちは模型の箱

が沢山落っこちまって、」

平太「克代さん、俺、やっちゃまった……」

克代「あんたはいつもやっちゃまってるだろ？」

仕事転々とするは、趣味に生活費つぎ込む

は、驚きやしないけど今度はなんだよ？」

平太「操ちゃんが、出てった」

S E 背中を強く叩く音

平太「いってえ！！」

克代「あたしゃ浮気するやつが一番嫌いなん

だ！」

平太「ちが、違うって！」

克代「じゃ、なんだよ！？」

S E ドリンクの氷の音

克代「ああ！ あんたにゃアイスコーヒーも

勿体ないや！」

平太「家族よりジオラマのほうが大事な男な

んだらうか？ 俺は……。ほんと、最低だ」

克代「バカだね。ほんと大バカだよ！ ああ、操ちゃんはさっさと別れたほうがいいかも
しんないね！」

平太「操ちゃんにお嫁さんにして言われた時、
なんかのドツキりだと思った。俺、やっぱ
結婚するべきじゃなかったのかも、」

S E どんどんと机に頭を打ち付ける

克代「やめな、ったく。そんなに頭を打ち付
けたらもっとバカになっちまう。そういう
不器用なところは、あんたの取り柄でもある
けど、」

平太「（半泣きで） 操……、 健太……、」

克代「（ため息）ちよっと待ってな！」

平太「うう？」

S E 箱を開け、紙の包みを広げる音

平太「克代さん、なにこれ？」

克代「特別に、操ちゃんの頼み、聞いたんだ」

平太「この、家の模型は？」

克代「操ちゃんの理想のうちだっけさ。木造

二階建て、小っちゃい庭付き！」

平太「え？　これ、俺のジオラマのための？」

克代「来月、誕生日なんだから？」

平太「誕生日……」

克代「あの子はね、ジオラマに目をキラキラ

させてるあんたがほんとに好きなんだ。厳

しい家庭で息がつまるように育ったから、

だからあんたみたいなバカが、面白くって

仕方ないんだよ」

平太「操ちゃん、俺が言ったこと、覚えて

たんだ。どうしよう、俺、」

克代「自分で考えな！　大事な人、取り戻す

にはどうしたらいいのか？」

S E 単行列車の走行音

平太 M 「克代さんに頼んで、操ちゃんのおうちを持ち帰った。赤い屋根に黄色い壁、庭には白い小さな花たち。それは見れば見るほど、可愛いらしいおうちで」

S E 扉を閉める音

平太 「操ちゃん。来てくれて、ありがとう」

操 「帰ってきたんじゃない。ちょうど、健太の服も取りに来たかったから、」

S E どんと床に座る音

操 「なに？ 土下座でもするつもり？ そんな

なことしたって、」

平太 「土下座なんかじゃ足りない！」

操 「え？」

平太 「聞いてほしい。あの時、俺がどう思ったか」

操 「地震の日のこと言ってるの？」

平太「あの日、あんなに部屋がガタガタ揺れて、俺は、」

操「大事なジオラマ？ 守ったのよね？」

平太「確かに、ジオラマは俺にとって、とてもとっても大事だ。でも、最初に思ったのは、操と健太のことだ！」

操「うそよっ！」

平太「嘘じゃない！ 操が健太をぎゅっと抱きしめて、その腕にこう、守るように、」

操「当たり前でしょ？ 健太はまだあんなに小さいのよ！？」

平太「それで俺、安心しちゃったんだ。大丈夫だ、健太は操ちゃんが守ってる。だから俺は、ジオラマを……」

操「それが最低だって言ってるの！」

平太「そうだ、俺は最低だ！ 操ちゃんが健太を守ってるなら、操ちゃんを守るのは誰だ！？ 俺じゃないかっ！？ だから俺は決めた！」

操「え？」

平太「今から、このジオラマに、大地震がやってくる！」

操「はあ？」

S E ジオラマの模型列車を走らせる

操「いったいなんなのよ？」

平太「ここ、見て！」

操「え！ ジオラマのおうち！？ 私が頼んだ模型が、なんでここに！？」

平太「……行くよ」

S E ジオラマをがたがた揺らす音

ジオラマが壊れていく

平太「（つらそうに）うう……」

操「（驚いて）な、なにやってんのよ！？」

S E ジオラマを揺らす音、止まって

平太「最後は、これで……、」

操「かなづち！？　なにをするのっ！？　ジオ

ラマ、壊れちゃう！」

平太「トドメだーっ！」

S E　ジオラマをかなづちで一撃する

操「平太さんっ！？」

平太「（泣きながら）ジオラマが操や健太より
大事だって言うのかよ！？　もしこのジオ
ラマのおうちに操と健太がいて、これがつ
ぶれたら、俺は、」

S E　ジオラマを破壊し続ける音

平太「どうすんだよ！？　つぶれちゃっても
いいのかよ？　三人のうちが、めちやくちゃ
になってもいいのかよー！？」

操「やめてっ！　平太さん、」

平太「いい訳ないだろう！　このうちは、俺

が守るんだろうが！ わああああ」

S E 大きな破壊音のあと、

平太の大きな泣き声と

模型列車の車輪がから回る音

それらが次第におさまって、

やがて穏やかな波の音

平太 M 「操ちゃんと俺は、海開き直前の田井

ノ浜海岸にやってきた。波打ち際で待って
いた、操ちゃんのお母さんに抱っこされた

健太を見た時、涙がでた」

S E 赤ん坊の声

操 「健太、お利口だったね」

平太 「（涙声）健太、ごめんな」

操 「パパね、あんなに大事にしてたジオラマ、
壊しちゃったのよ？ でも、ママからのプ
レゼントのジオラマのおうちだけは、どう

しても壊せなかったみたい」

S E 赤ん坊の笑い声

波音の中、砂浜を歩く二人

操 「またいつか、作ってもらわなきゃね。この素敵な、海岸の駅のジオラマを！」

平太 「それって、」

操 「私がどうして、平太さんを好きになったか、わかる？」

平太 「……え？」

操 「平太さん、最初にジオラマ見せてくれた時、こう言ったの。この街は俺たちの街だ、この街のどこかに、俺たちは住んでる。そして、列車がこの街にいろんな人を運んでくるんだって。それ聞いて、なんだか、あったかいなあって」

平太 「操ちゃん……」

操 「平太さん。このジオラマになるくらい素敵な海の街で、もう一つ部屋があるところ、

探さない？」

平太「もう一つの部屋……？　　うん！　　そうだね、俺、この街で、操ちゃんと健太のこ
と、ちゃんと守るから！」

操「（嬉しそうに）平太さん……」

平太「えと、あのさ？　　あの、押し入れのジ
オラマたちは、どう、しよう？」

操「平太さんと健太があのだジオラマで遊ぶの
が夢なのに、捨てさせるわけないでしょ
う？　（苦笑い）」

平太「操ちゃん！　　俺、引っ越すまで、ジ
オラマ我慢する。あの部屋、健太がのびのび
遊べるように片付けるから」

操「うん、壁際に低い棚置いて、そこに健太
のおもちゃと、防災グッズしまつて、」

平太「寝る時に周りに高いものがないよう
に、いつも言ってたもんね。あ、俺、台
所も危ないってこないだ気づいてさ、」

操「そうなの。棚から食器が飛び出さないよ
うにしたいんだけど、」

平太「健太にガラスが降ってきたら大変だからなあ。じゃあさ、こういうのはどう？」

S E 二人の会話、波音にかき消されてやがて自転車を漕ぐ音

平太 M 「操ちゃんと俺は、ジオラマのおうちをお守り袋に入れた。今日は俺が健太を保育園に送る番だ。お守り袋が、今日も健太を守ってくれますように」

S E 自転車を漕ぐ音にかぶさり、単行列車が近づいてくる音

平太「健太、見て！ あれがむろとだよ！ ああ、今日はいいいこと、ありそうだなあ！」

S E 赤ん坊の嬉しそうな声
単行列車の汽笛が鳴る

(完)

